

令和 3 年 6 月 17 日現在

機関番号：34432

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17K04389

研究課題名（和文）青年期における日々の母娘関係についての一研究

研究課題名（英文）A Study of Day-to-Day Mother-Daughter Relationships in Adolescence

研究代表者

篠原 恵（小高恵）（Shinohara, Megumi）

太成学院大学・人間学部・教授

研究者番号：90321132

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は中学1年生の母娘の3組のペアを対象に質問紙による測定を100日以上行い、日々の母娘関係の影響過程について検討した。日々の母娘関係の主要な共通概念である「親和因子」と「主張因子」を用いて、前日から当日の影響過程を検討するために時間的な遅れ(ラグ)を入れたモデルの動的因子分析を行った。その結果、3組に共通した関係として同じ因子間で母と娘の間で有意な関連が認められた。また母の親和因子と母の主張因子の間で有意な負の相関が認められた。さらに母娘関係の時系列の関連についてその日の母娘関係が次の日の母娘関係に影響しており、結合と分離が短い時間の中で影響しあっていることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

発達心理学的な観点からみると、青年期の親子関係は転換の時期、また再形成の時期である。この時期は子どもから大人になる移行期であり、心理的離乳という言葉で表わされるように親離れしていく時期である。これまでの親子関係研究の多くは親の子への態度・行動の研究、あるいは子の親への態度・行動についての研究というようにいずれかの視点に立った研究が多く、両者の相互作用を検討した研究は多くない。本研究では複数の親子を対象にし、両者の相互作用に加えて、毎日の親子のやりとりといった時間軸で捉えることでその影響過程を明らかにした。このことは、これまでの研究になく、非常に独創的で意義があったと思われる。

研究成果の概要（英文）：Daily reciprocal mother-daughter interactional relationships were investigated by applying dynamic factor analysis (DFA). Three mothers and their daughters in junior high school independently completed the Mother-Daughter Questionnaire daily for over 100 consecutive days. The data were analyzed by using multi-group simultaneous analysis without a time lag, which confirmed two common factors in their relationship, "Affiliation" and "Assertiveness". Then, we examined the latent factor series with time series for Lag 1 model using DFA. The results indicated that the identical mother-daughter relationship factors on a given day were correlated with each other and the mother-daughter relationship on a given day affected their relationship on the next day. It is concluded that connectedness and individuality of mother-daughter relationships interact with each other in day-to-day relationships.

研究分野：発達心理学

キーワード：母娘関係 青年期 動的因子分析

### 1. 研究開始当初の背景

発達心理学的な観点からみると、青年期は親子関係の転換の時期であり(Grotevant & Cooper, 1986)、心理的離乳という言葉で表わされるように青年が親離れしていく時期にある(西平, 1990)。青年期の親子関係は、青年の心理的側面と関係しているということも報告されており(平石, 2000; 渡邊・平石, 2010; 水本・山根, 2011; 小高, 2015; 小高, 2014; 小高, 1994)、青年期においても、親子関係は青年の心理的発達や適応に重要な役割を担っていると思われる、この時期の母娘関係を調べることは、娘の心理的な側面を探る上で有効な手掛かりになる。

母娘関係、そして娘の心理的側面を研究するためには、様々な分析法がある。これまでの親子関係研究では、主として、集団を対象とした因子分析法を用いた横断的な研究や、2 時点、あるいは 3 時点といった長い時間の中で起こる変化をマクロの視点で捉える縦断的な研究がなされてきた。しかしながら、個々人の短い時間に起こるダイナミックな動きをとらえる研究はなされてこなかった。青年期の母娘関係は日々変化しており、そのダイナミックな動きをとらえていく必要がある。すなわち、日々の母娘関係の相互作用のデータを時間経過の中で蓄積し解明していくミクロ的な視点からの研究が必要になる。このミクロな視点からの時間経過の変化を捉えることのできる有効な分析手法に、動的因子分析(dynamic factor analysis: 以下、DFA)がある。紺田・清水(2015)は、潜在変数において系列依存性を取り扱うモデルである DFA を応用した研究を行っている。(紺田, 2015; 紺田・清水, 2015)。このモデルは、測定した変数から因子を特定し、時間的な遅れであるラグ(lag)を分析に取り入れることによって、時間の遅れの関係を示し、時間経過での影響の大きさを推定しようとするものである(Figure 1)。DFA は共分散構造分析モデルを応用することにより、個人を繰り返し測定して得られた多変量データに潜在する因子をラグ因子として特定し、持続的な時系列構造をラグ因子間のパス関係から検討しようとするものであり(紺田・清水, 2015)、時系列の親子関係研究を行う上で有効な手法であると考えられる。

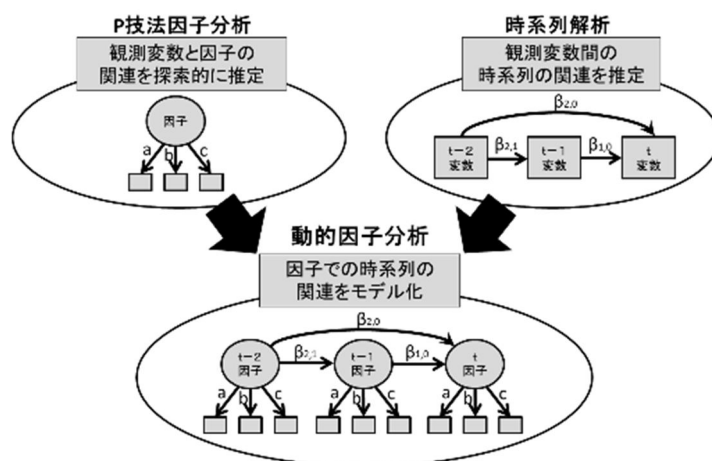


Figure 1 動的因子分析の模式図 (小高・紺田, 2015)

### 2. 研究の目的

本研究においては、思春期の娘を持つ母親を対象とし、日々の母娘関係のやりとりを明らかにすることを目的とする。具体的には、まず複数の日々の母娘関係の共通した因子を探るためにそれぞれの母娘関係に潜在する因子を P 技法因子分析により分析し、次に得られた共通因子を用いて日々の母娘関係の時間経過の影響過程を明らかにするために動的因子分析により時系列モデルを同定する。そして法則定立的な観点と個性記述的な観点からその影響過程を明らかにする。さらに日々の母娘関係と娘の心理的な側面(情動性)の関連についても検討する。

### 3. 研究の方法

(1) 調査参加者と測定期間: 中学生 1 年生の女子 3 名とその母親 3 名であった。測定期間については 145 日, 155 日, 144 日である。青年期の娘を持つ母親とその娘に調査を依頼し、個人情報に関連法規を遵守すること、長期に亘る研究への参加は自由意志であること、調査の中断あるいは中止に関しては対象者の子どもと親の双方の自由意思で判断できること等の説明を行い、書面で許諾を得た。調査では、毎日同じ時間くらい(寝る前)に、今日一日を振り返りそれぞれの項目にどのくらいあてはまるか評定してもらった。

(2) 測定項目: 母娘関係尺度: 小高(2000, 2010, 2011)、辻岡・山本(1976)の項目を元にして作成した 22 項目を用いた。情動性の尺度: 清水・山本(2008)を参考にして作成した情

動性に関する項目 5 項目を用いた。評定は 6 段階評定である。

(3) 分析手続き：それぞれの母娘関係について P 技法因子分析により構造分析を行った。3 組に共通した因子を同定するために時間差を入れないラグ 0 モデルを作成し、構造方程式モデリング (Structural Equation Modeling: 以下 SEM) により分析を行った。ラグ 0 のモデルに基づいて、前日と当日の時間経過を含んだ 3 組の母娘の 2 者関係の同時分析の時系列モデル (ラグ 1 モデル) を作成し、動的因子分析を行った。日々の母娘関係と母と娘の情動性との時間差を入れないラグ 0 モデルを作成し、SEM により分析を行った。

#### 4. 研究成果

それぞれの母娘関係に潜在する因子を P 技法因子分析により検討した結果、日々の母娘関係の構造は、母と娘それぞれの組において 3~4 因子の因子で構成されている結果となった。また、これらの因子には、3 組の母と娘に共通する因子とそうでない個別の因子があり、共通する因子として「母娘の親和的コミュニケーション」に関する因子と「娘の自己主張」に関する因子が存在していることが明らかとなった。

上記で得られた二つの因子、すなわち「母娘の親和的コミュニケーション(親和因子)」と「娘の自己主張(主張因子)」を用いて、時間経過を入れない方法で母娘関係のモデルを作成しラグ 0 の多集団同時分析を SEM により分析したところ、これらの因子が 3 組の母娘関係の潜在する不変的な因子であることが確認された。次に前日から当日の影響過程を検討するために時間的な遅れ(ラグ)を入れたモデルの動的因子分析を行った。その結果、3 組に共通した関係として同じ因子の間で母と娘の間で有意な正の関連が認められた。また母の親和因子と母の主張因子の間で有意な負の相関が認められた。さらに母娘関係の時系列の関連についてはその日の母娘関係が次の日の母娘関係に影響しており、いくつかのペアにおいては娘の母への主張が次の日の母への親和的な態度に影響していることが確認され結合と分離が短い時間の中で生じていることが明らかとなった。

さらに日々の母娘関係と情動性との関連について検討した結果、娘の情動性と母の情動性が母娘関係を介して間接的に関連する場合や、娘の情動性と母の情動性が直接的に関連する場合や、娘の情動性と母の情動性が直接的にも間接的にも関連しない場合など、いくつかのパターンが存在することが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 小高 恵・紺田広明	4. 巻 22
2. 論文標題 中学生における日々の母娘関係の時系列的な研究 - 3組の母娘ペアデータを多集団同時分析に適用して -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 太成学院大学紀要	6. 最初と最後の頁 33-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20689/taiseikiyou.21.0_1	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小高 恵、紺田 広明	4. 巻 20
2. 論文標題 日々の母娘関係のP技法による因子分析的研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 太成学院大学紀要	6. 最初と最後の頁 53-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20689/taiseikiyou.20.0_53	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Megumi Kotaka, Hiroaki Konda
2. 発表標題 Time Series Study on Day-to-Day Relationships between Mothers and Adolescent Daughters in Japan: Multi-group Simultaneous Analysis of Three Pairs
3. 学会等名 The 17th Biennial Conference of the European Association for research on Adolescence（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小高 恵
2. 発表標題 第二反抗経験と母親イメージとの関連
3. 学会等名 日本心理学会第 83 回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小高 恵
2. 発表標題 第二反抗経験と母親の養育態度との関連
3. 学会等名 日本発達心理学会 第31回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小高 恵・紺田広明
2. 発表標題 日々の母娘関係と情動性の関連についての一研究 3組の母娘の2者関係の同時分析から
3. 学会等名 日本教育心理学会 第60回総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小高 恵
2. 発表標題 大学生の母子関係とパーソナリティに関する一研究
3. 学会等名 日本発達心理学会 第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小高 恵, 紺田 広明
2. 発表標題 日々の母娘関係の一分析 娘の認知する母娘関係の因子比較
3. 学会等名 日本心理学会第 81 回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小高 恵, 紺田 広明
2. 発表標題 日々の母娘関係の分析 母の認知する母娘関係の因子比較
3. 学会等名 日本教育心理学会第 59 回総会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 小高 恵	4. 発行年 2017年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 108-109
3. 書名 君の悩みに答えようー青年心理学者と考える10代・20代のための生きるヒントー7章：親子関係「どうしたら家族に目を向けてくれるでしょうか？」	

1. 著者名 小高 恵	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 55-72
3. 書名 子ども家庭支援の心理学入門 第4章 「青年期以降の発達の特徴と課題」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	紺田 広明  (Konda Hiroaki)  (60734077)	福岡大学・公私立大学の部局等・講師    (37111)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------